



令和8年度関東地区福祉研究発表会 福祉研究部門 研究趣旨



神奈川県立津久井高等学校

日常生活で支援や配慮が必要な人が周囲に理解と協力を促すために掲げる福祉マークは、視覚的なメッセージが伝わりやすい一方で、見た目では判断できないことから誤解を生みやすいという課題がある。本研究では、津久井高校の生徒・教員を対象としたアンケート調査を通じ、認知度や理解度を分析した。特に「国際シンボルマーク」は認知度が高いものの、その適切な内容の理解が広がっていない現状がある。私たちはこの点に着目し、デザインがもたらす視覚的影響と課題、解決策を検討した。

埼玉県立戸田翔陽高等学校

近年、高齢者の孤独死者数が増加している。埼玉県戸田市では「社会的処方」という概念を用いて積極的に取り組みを進めていることを知った。しかしながら、多くの方にこの言葉が知られていないのが現実である。そこで先行研究や校内アンケートを通じ、SNSの活用と家族・友人間での情報共有が人との関わりの増加に効果的であるということがわかった。私たちは幅広い年代の人々に社会的処方という言葉や地域での取り組みを広めるために紹介動画やチラシの作成、地域サロンでの周知活動を行った。その結果、動画は多くの人に視聴され、一定の効果を示すことができた。さらに社会的処方の取り組みを分かりやすく伝えるための名称の検討も行った。

千葉県立君津青葉高等学校

近年、男女平等の実現に向けた取り組みが進み、育児休業制度についても新たな制度改正が行われた。私たちは、男性の育休取得がなぜ十分に進まないのか関心を持ち、本研究を行った。研究では、校内アンケート、育休取得経験者へのインタビュー、学校近隣企業の実態調査を実施した。その結果、高校生世代では将来的に育休を取得したいと考える人が多く、企業における取得率も上昇傾向にあることが分かった。一方で、取得を促進するためには制度のさらなる周知に加え、職場の理解を広げることが重要であり、特に管理職や役職者への働きかけが必要であると考えられた。本研究を通して、男性がより育休を取得しやすい社会の実現について考察した。

群馬県立吾妻中央高等学校

本研究は、介護現場のニオイ問題を解決するため、介護者のストレス軽減とリフレッシュを図ることを目的とする。従来の消臭に加え、香りの調和を利用した「感覚的消臭」に着目し、空間用のアロマストーンと個人用のアロマクリップ（マスク装着型）の両方を検証している。アロマストーンの研究では実験結果から適切な使用環境や活用法を提案し、アロマクリップの研究では香りの分散や強さを検証のうえ介助で使える実用的な改良を加えた。空間と個人の嗅覚の両面からアプローチし、介護現場に適した実践的な快適環境づくりを目指す。

栃木県立真岡北陵高等学校

現在、栃木県には多くの外国人が働いており、介護現場でも外国人介護士の活躍が増えています。そこで私たちは、外国人介護士が働きやすい環境をつくるために何ができるかを考えました。インタビューを通して、外国人介護士の方は方言や訛りによってはコミュニケーションが困難、日本人介護士の方は外国人介護士向けの研修が必要だとして回答いただきました。そこからEPA3カ国の文化と日本の文化を理解し合えるレクリエーションを企画・作成し、外国人介護士が働きやすい環境づくりにつながるきっかけを探りました。